２６年１１月研修会

「額田王の生涯を訪ね
忍阪・多武峰街道を巡る」

資　料

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ

（１１月１１日）

「額田王の生涯を訪ね忍阪・多武峰街道を巡る」

（２６・１１・１１　藤田　秀憲）

７世紀中ごろから８世紀初頭にかけて、唐の興隆のもと東アジアは激動しました。
我国も氏姓制度から律令制中央集権国家をめざし、乙巳の変・大化の改新、白村江の大敗北、近江遷都、壬申の乱など外交や内政に変革と抗争が繰り広げられた飛鳥時代中期を、ひときわ鮮やかに生きた女性がいます。
今回は、飛鳥時代の万葉歌人「額田王」の生涯を通して、時代の息吹に触れてみたいと思います。華やかな前半生と後半生の静けさの中に、時代の変遷と額田王に関わりのある人々を想います。

訪れる「忍阪」の地は、記紀の神武東征の際、待ち受けていた八十建を征伐した「忍坂大室屋」の伝承地として知られおり、和歌山県橋本市の隅田八幡宮所蔵の国宝・人物画像鏡に「癸未年・・・在**意柴沙加宮**時」と金石文で刻まれている古い地名であり、第 19 代允恭天皇（5 世紀中頃没）の皇后で、息長氏の血を引く忍坂大中姫の忍坂宮があったという伝承が残されています。

推古天皇崩御後、山背大兄王と皇位を争った田村皇子（舒明天皇）の父（忍坂彦人大兄皇子）は非蘇我氏系皇族の祖であり、母（広姫）も息長氏の出身、舒明天皇の和風諡号は「息長足広額」であり、息長山田公がしのびごとを務めていることから、忍阪と近江の豪族「息長氏」との深い繋がりが窺えるとともに、「乙巳の変」への予兆を感じます。
また、額田部氏の祖（天津彦根命）を祀った生根神社があり、背後の宮山（忍阪山の一部）をご神体としています。　額田王、鏡女王が養育された地であり、額田王が夫の遺志を受け継ぎ、粟原寺の完成とゆかりのある人々の菩提を祈りながら静かに晩年を過ごした地ではないかと言われています。

舒明天皇御陵、鏡女王墓、粟原寺跡を巡った後、多武峰の談山神社に紅葉を訪ねます。
中大兄皇子と中臣鎌足が 645 年 5 月この多武峰の山中で、蘇我氏打倒の密談をしたところです。鎌倉時代の寺伝によると、長男の定恵が唐から帰国後、父の墓を由縁深いこの地に移し、十三重塔を建立したのが始まりといわれています。境内の東殿には鏡女王（鎌足の嫡室）もお祀りしています。

≪行程≫

出発 8:30 中小企業会館⇒10:00 桜井駅南口広場（トイレ）⇒忍阪街道駐車場

⇒　玉津島明神（拝観）⇒　生根神社（拝観）⇒　舒明天皇押坂内陵（拝観）

⇒　鏡女王墓（拝観）⇒　大伴皇女墓（拝観）⇒　神籠石⇒　石位寺（トイレ）

⇒　粟原寺跡（見学）⇒　倉橋溜池ふれあい公園（昼食）

⇒　14:00 談山神社（拝観と見学）⇒　飛鳥資料館（見学）

⇒近鉄奈良駅前（17:00 頃解散予定）

鏡　王　女

かがみのおおきみ､生年不詳　－　６８３年没、日本書紀では鏡姫王と記す。興福寺縁起では藤原不比等の生母と記載。額田王の姉との説がある。始め天智の妃であったが、後鎌足の正妻となる。鎌足の病気平癒を祈り山階（やましな）寺を（後の興福寺）を建立した。舒明天皇押坂陵内に墓があることから舒明天皇の近親という説もある。
いずれにせよ素性は謎につつまれているが万葉集に４首のすばらしい歌を残している。

秋山の　樹(こ)の下隠(がく)り　行く水の　我こそまさめ
思ほすよりは　　巻 2-92

玉櫛笥(たまくしげ)　覆(おお)ふを安み　明けていなば
君が名はあれど　我が名し惜しも　　巻 2-93

風をだに　恋ふるは羨(とも)し　風をだに
来むとし待たば　何か嘆かむ　　巻 4-489

神奈備(かんなび)の　石瀬(いわせ)の社(もり)の　呼子鳥(よぶこどり)
いたくな鳴きそ　我が恋まさる　　巻 8-1419

異母兄弟間の恋

万葉の時代の結婚はおおらかで異母兄弟や、伯父と姪とのいわゆる近親結婚も認められていました。天智天皇も天武天皇も妃をたくさん持っていましたので、異母兄弟もたくさんいました。また天武は天智の娘を何人も娶りました。唯一タブーとされたのは、同母の兄妹間の結婚です。

許されない恋1

天武の娘である但馬皇女は異母兄弟で太政大臣高市皇子と結婚していました。しかし、親（天武）が決めた相手よりも異母兄弟の穂積皇子を愛してしまいます。二人の間は人の噂に上るようになります。しかし、但馬皇女は自分の愛に生き、男の元へ自分から会いに行きます。二人の仲は天武の怒りを買い穂積は近江に行かされ、皇女と引き離されてしまいます
但馬皇女の穂積皇子との密会が露見した際に詠んだ歌

人言(ひとごと)を　繁(しげ)み言痛(こちた)み　己が世に
未だ渡らぬ　朝川渡る　　巻 2-116

但馬皇女の薨去した後、但馬皇女をしのんで穂積皇子が作った歌

降る雪は　あはにな降りそ　吉隠(よなばり)の
猪養(いかい)の岡の　寒からまくに　　巻 2-203

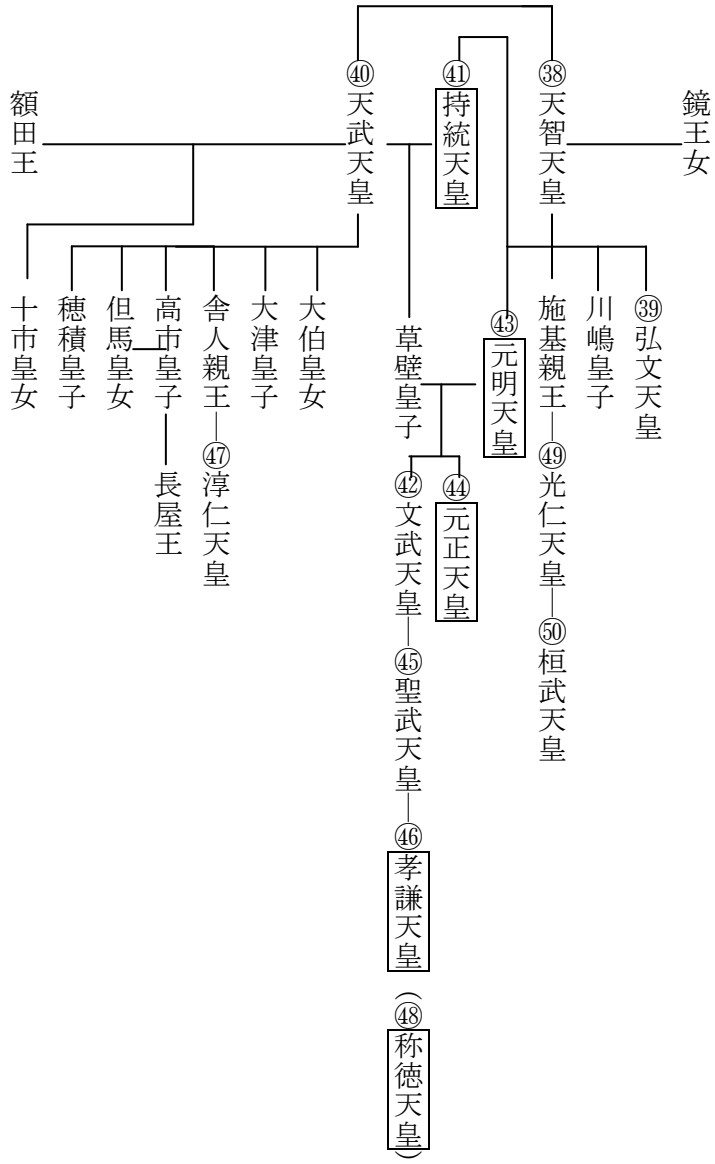
許されない恋2

天武と額田王の間に生まれた十市皇女は大友皇子（弘文天皇）と結婚し葛野王(かどのおう)を生みます。しかし､ほどなく壬申の乱が起こり夫と父が戦います。乱の終息後、十市皇女は天武に引き取られ飛鳥の都で暮らします。天武の長男高市皇子は壬申の乱の大将軍として近江軍を打ち破ります。高市皇子は母が卑母なので帝位は望めませんでしたが、天武は娘の但馬皇女を嫁がせ太政大臣に任命します。高市皇子は近江朝廷時代から十市皇女を恋しく思っていました。しかし、十市皇女は大友皇子と結婚し、大妃(おおきさき)と呼ばれていました。大妃は皇后に匹敵し天皇にもなれる位です。帝位を望めない高市皇子は泣く泣く十市皇女との恋をあきらめざるをえませんでした。飛鳥に来てほどなく十市皇女は亡くなります。一説には自殺したとの説もあります。高市皇子が十市皇女を偲んで詠んだ歌一首

山吹の　立ちよそいたる　岩清水
汲みに行かめど　道の知らなく　　巻 2-158

歴文１１月研修会資料①

５３８年　㉙欽明天皇の時に百済より仏教伝来する
６４５年　乙巳の変（大化改新）
６５８年　有間皇子藤白坂（海南市）で刑死す（十九才）
６６３年　白村江（はくすきのえ）の戦い
６７２年　壬申の乱
６８６年　天武天皇崩御、大津皇子死賜う（二四才）



額　田　王

７世紀中頃から８世紀初頭にかけて、唐の興隆のもと東アジアは激動した。

我が国も氏姓制度から律令制中央集権国家を目指し、乙巳の変・大化の改新、白村江の大敗北、近江遷都、壬申の乱など外交や内政に変革と抗争が繰り広げられた飛鳥時代中期を、ひときわ鮮やかに生きた女性がいる。

額田姫王（万葉集では額田王）は日本書紀巻28に「（天武）天皇初娶鏡王女額田姫王、生十市皇女」とある。万葉集に残された長歌３首、短歌９首から時代の息吹を生きいきと感じることが出来る。また一説では、鏡姫王（鎌足嫡室）の異母妹とも言われている。

中大兄皇子や大海人皇子の母親の皇極・斉明天皇の傍に仕え、才気煥発、物怖じしない性格で可愛がられ、天皇に代わってその御心を歌い上げる役割を担っていた。

○　皇極天皇代（大化４年（648）近江比良宮行幸の時皇極上皇御製）

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の宮処の仮廬（かりほ）し思ほゆ（万1-7）

最初は弟の大海人皇子と結ばれ、１７才で十市皇女を生み、百済救援で征西に赴くときには、中大兄皇子に召されており、斉明天皇や中大兄皇子と行動を共にしていた。

○　斉明4年（658）紀温泉に幸せる時、額田王の作る歌

三諸（みもろ）の山見つつゆけ我が背子がい立たせりけむ厳橿（いつかし）が本（万1-9）

○　斉明天皇代　（斉明７年（661）伊予国塾田津の石湯行宮（いわゆのかりみや）に泊まった時の斉明天皇御製）

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（万1-8）

白村江の戦いに大敗した後、中大兄は敗戦処理に追われ６６７年人々の不満をよそに近江遷都を決行した。

○　額田王、近江の国に下る時に作る歌

味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の山の際に　い隠るまで　道の隈　い積もるまでに　つばらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見放（さ）けむ山を　心なく雲の　隠さふべしや　（万1-17）

三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや（万1-18）

６６８年　天智天皇即位。＜額田王３３才＞十市皇女大友皇子の妃となる。

○　天皇の内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶、秋山の千葉の彩を競憐はしめたまふ、額田王の歌を以て判れるその歌

＜春秋争い＞

冬こもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　黄葉つをば取りてぞ偲ふ　青きをば　置きてぞ嘆くそこし怜し　秋山我は（万1-16）

蒲生野遊猟レリーフ（滋賀県東近江市　万葉の森・船岡山公園）

○　天皇の蒲生野に遊猟（みかり）したまへる時額田王の作る歌（668年）（饗宴時の歌か）

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（万1-20）

○　これに応え大海人皇子の歌

紫のにほへる妹を憎くあらば人妻故に吾恋ひめやも（万1-21）

６６９年　鎌足没（５６才）。
十市皇女葛野王を生む。＜額田王３４才＞
（鎌足の死後、天智天皇と大海人皇子との間は、皇位継承問題で冷え込む）

６７１年　大友皇子、太政大臣へ。
大海人皇子、鸕野讃良皇女とともに吉野へ隠棲
天智天皇崩御（４６才）。

○　天智天皇の大殯(おおあらき)の時の歌

かからむとかねて知りせば大御船泊（は）**てし泊に標結**（しめゆ）**はましを（万2-151）**

６７２年　壬申の乱勃発、大友皇子は敗退自死する。　＜額田王３７才＞
６７３年　天武天皇　飛鳥浄御原宮で即位。
残された十市皇女に付き添い明日香に戻り、静かな生活に入る。
６７８年　十市皇女　自死＜額田王４３才＞
十市皇女は伊勢神宮の斎宮として伊勢に赴く直前、宮中で亡くなり、天武天皇は大いに悲しみ赤穂に葬ったと日本書紀にある。
＜奈良市高畑町1352にある比売神社は十市皇女を祭神とし、市寸嶋比売（いちきしまひめ）を脇座とする。近くに赤穂神社がある。＞

○　十市皇女の薨ぜし時に、高市皇子尊の作らす歌三首（そのうちの一首）

山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく（万2-158）

以後、孫（葛野王９才）の行く末を見守ることが額田王の生きがいとなる。

当時の神祇・政治の有力者である中臣大嶋（不比等の後楯、又従兄弟）と再婚したのもこの頃ではないかと考えている。

６８１年　草壁皇子立太子
６８３年　鏡姫王　没
「秋七月丙戌朔己丑、天皇幸鏡姫王之家、訊病。庚寅、鏡姫王薨。」（日本書紀）

６８６年　天武天皇崩御。持統称制を始める
大津皇子謀反により処刑

○　吉野の宮に幸せる時（持統4年690）弓削皇子(20才)の額田王(55才)に贈り与ふる歌一首

古に恋ふる鳥かも弓絃葉の御井の上より鳴き渡りゆく

○　額田王の和へ奉る歌一首　倭京より進入る

古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きし我が思へるごと（万2-112）

○　吉野より蘿生せる松が枝を折取りて遣りたまへる時額田王の奉入る歌一首

み吉野の玉松が枝ははしきかも君が御言を持ちて通はく（万2-113）

この歌を最後に、万葉集から額田王の歌は見られなくなる。

６８９年　草壁皇太子薨去（軽皇子６才）
６９０年　持統天皇　即位
６９３年　中臣大島　没
６９４年　藤原宮遷都
６９６年　高市皇子　薨去

「懐風藻」によれば持統天皇10年（696年）に高市皇子が薨去した後、持統天皇が数ある天武天皇の皇子達を退け、自らの孫である軽皇子を皇太子にしようとした画策した際、弓削皇子が「古来から兄弟間での皇位の継承は一般的である。」と意見を述べた。
これに対して葛野王は弓削皇子を一喝し「日本では古来から直系相続が行われており、兄弟相続は争いの元だ。」として皇位の直系相続を主張したという。

その背景には、葛野王の祖母である額田王が孫の行く末を慮って、持統天皇の意向を受けて、軽皇子への皇位継承を支持する発言を促したものと思われる。

６９７年　文武天皇（軽皇子）即位
７０１年　持統太政天皇崩御（５８才）。
７０７年　文武天皇崩御（25才）～首皇子７才
　　元明天皇即位（草壁皇子の妃）
７１０年　平城京に遷都

文武天皇（軽皇子）の即位（697）を見届けた持統太政天皇は 701 年に崩御するが、707 年に文武天皇も２５才の若さで崩御（首皇子７才）したため、草壁皇子の妃の阿閇皇女が即位（元明天皇）し、藤原不比等の主導で藤原京から平城京へ遷都した。

７１２年　古事記なる（太安万侶）
７１４年　首皇子立太子
７１５年　元正天皇即位（元明と草壁の娘）
　　粟原寺完成

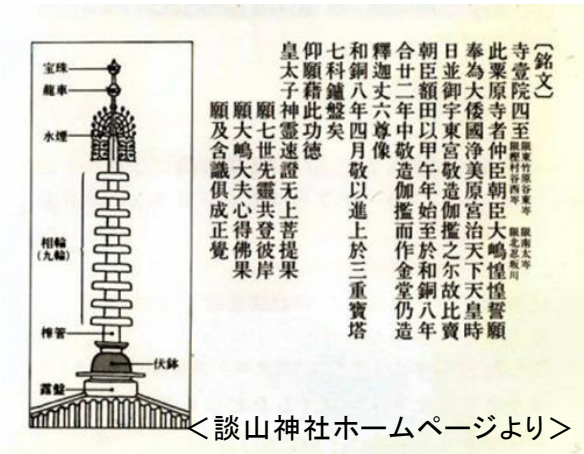
談山神社の国宝「粟原寺三重塔伏鉢」の銘文によれば、６８９年中臣大嶋（藤原鎌足の従兄弟の中臣許米の子）は草壁皇太子の菩提を弔うために、粟原寺（おうばらでら）の造営を発願するが果たせず、大嶋の死後、比売朝臣額田が持統天皇８年（694）から和銅８年（715）までの２２年を費やして、この地に伽藍を建て、丈六釈迦仏像を鋳造し、金堂に安置した。
また三重宝塔に七科の鑪盤を進上し、「草壁皇太子神霊　速やかに無上菩提の果を証せんことを」「七世の先霊（斉明天皇、天智天皇、大友皇子、十市皇女、天武天皇、持統天皇、文武天皇）共に彼岸に登らんことを」「大嶋大夫必ず仏果を得んことを」願ったとある。

この比売朝臣額田が皇籍を離れて、中臣大嶋と再婚した額田王ではないかといわれている。

額田王の前半生は、皇極（斉明）天皇に仕え、大海人皇子と結ばれ１７才で十市皇女を生み、後に中大兄皇子（天智天皇）に召され、「采女的なるもの」として仕え、神に仕える巫女として特殊な霊力を持ち、催事に伴う歌舞に巧みで、催事後の饗宴を宰領し、即興の才があり、社交性に富む才色兼備な女性（井上靖「額田女王」より）で、霊力と歌の才能を通じて華やかに自由闊達に宮廷生活を送った。
しかし、後半生は壬申の乱を境に一転して、夫を失った娘（十市皇女）を支え、父と母を失った孫（葛野王）の行く末を見守り、時代の変化の中で当時の神祇・政治の有力者である中臣大嶋大納言と再婚し、晩年は夫の遺志を受け継ぎ、亡き人々の菩提を弔いながら粟原寺の完成を心の支えに、静かに長寿を全うした。

７１５年　額田王　没　＜享年８０才＞
終焉の地は、舒明天皇の近くに埋葬された姉の鏡姫王と同じ忍坂の粟原寺跡のある付近と伝えられている。

粟原寺三重塔伏鉢　飛鳥時代（国宝）
（高35.2cm　直径76.44cm）



＜談山神社ホームページより＞

日本歴史年表（大化の改新～平安京遷都）

2011．2．1

西暦	和暦	出来事	都の変遷	備　考	
538		仏教伝来（552？）			
		百済、聖明王　仏像、経典を献じる			
			小墾田宮　（592推古）		622聖徳太子死去
					626蘇我馬子死去
			飛鳥岡本宮　（629舒明）		
			飛鳥板蓋宮(642皇極)		
645	大化１	乙巳の変/大化の改新始まる	（645孝徳）		645蘇我入鹿殺される
651			難波宮に遷都（651孝徳）		中大兄皇子、藤原鎌足
			飛鳥へ		
			（655斉明　重祚）		
663		**白村江の戦い**			
667			大津京に遷都（668天智）		
				山階寺（669）	668　行基誕生（堺市家原寺）
672		**壬申の乱**	（673天武）	（鏡王女）	
673			飛鳥浄御原宮	厩坂寺（移転）	
689		飛鳥浄御原令制定		元薬師寺（680）	
690			（690持統）	（天武天皇）	
694			藤原京に遷都（持統）		
				↓	
701	大宝１	大宝律令制定	（697文武）		
			（707元明）	↓	
708	和銅１	武蔵国秩父より銅を献上			
710	和銅３		平城京に遷都（710元明）	薬師寺・興福寺（移転）	平城京建設労力徴発、逃散難民続出、飢えて路傍に死す者多く→行基のもとに私度僧に
712	和銅５	**「古事記」成る**			
			（715元正）		
717	養老１				行基活躍(日本書記)
718	養老２	養老律令完成			
720	養老４	**「日本書紀」成る**			不比等死去（659～720）
					（天智、鏡王女の子？）
			（724聖武）		
729	神亀６	長屋王の変	→光明皇后		
734		大地震			
		天然痘大流行（735～737）			737藤原四兄弟死去
		２年連続の凶作			武智麻呂（南家）
		藤原広嗣の乱	聖武天皇の巡幸？		房前（北家）
			恭仁京→紫香楽宮→難波宮→紫香楽宮→平城宮		宇合（式家）
					麻呂（京家）
741	天平１３	聖武天皇、国分寺・国分尼寺建立の詔			
					743行基東大寺造営勧進
				745法華寺（総国分尼寺）	745行基　大僧正へ（日本初）
				（光明皇后）	玄昉筑紫観世音寺に流される
				747新薬師寺	
749	天平感宝１	陸奥国から金を献上	（749孝謙）	（光明皇后）	749行基没（82才）
					菅原寺（現喜光寺）
752	天平勝宝４	東大寺大仏開眼供養			
751		**懐風藻(751)**			
754		鑑真「律宗」を伝える			
			（758淳仁）		
		万葉集(759)		唐招提寺（759）	
			（764称徳　重祚）	西大寺（764）	764　仲麻呂の乱
769	神護慶雲３	宇佐八幡宮神託事件		春日大社（768）	
			（770光仁）		
			（781桓武）		
784	延暦３		長岡京に遷都(桓武)		
794	延暦１３		平安京に遷都(桓武)		

歴文１１月研修会資料④

忍阪の古墳

舒明天皇の御陵を中心に近親の方の墓と推定される古墳が３基ある。
橿考研・友史会の資料を参考に取り纏めた。

（詳しくは、別紙の皇統図を参照して下さい）

０．舒明天皇

押坂彦人大兄皇子（敏達天皇皇子で、母はその最初の皇后である広姫）の子で、母は糠手姫皇女（敏達天皇皇女で押坂彦人大兄皇子の異母妹）。

１．田村皇女（糠手姫皇女）

敏達天皇と采女：菟名子（うなこ）との間に生まれた皇女、舒明天皇の母。

２．大伴皇女

敏達天皇の父・欽明天皇と蘇我稲目の娘・堅塩姫（きたしひめ）との間に生まれた。
（敏達天皇の義兄弟、舒明天皇の大叔母）

３．鏡女王

額田王の姉という説があるが、『日本書紀』等には２人が姉妹だという記述はなく確証はない。初め天智天皇の妃だったが、後に藤原鎌足の正妻となる。

忍坂段ノ塚古墳（現・舒明天皇・押坂内陵）

古墳は南側に大きく聞く幅 105 m の前面部を最下段とした方形壇を３段重ねた背後上部に、2 段築成の八角形をなす墳丘を築いている。八角形をなす上部墳丘の高さは約 12m、対角線距離は約 42m を測る。方形壇の最下段前面は花崗岩を用いた列石が並べられる。

内部構造については詳らかでないが、文久二年（１８６２）の谷森善臣「山陵考」に、石室内に石棺が２基あり、奥棺は石室に直交、前棺は平行に置かれていたと言う里人の談が載る。

近世以来の考証によって、皇極元年（６４１）滑谷岡に埋葬され、翌２年（６４２）に改葬された舒明天皇の押坂内陵とされている。

忍坂段ノ塚古墳に隣接して、鏡女王忍坂墓と大伴皇女墓が所在する。

（8:石位寺）

円墳（現・鏡女王・押坂墓）

直径約 15m の円墳だが詳細不明。
「延喜式」には、鏡女王（ふつうは鏡王女―かがみのおおきみのことだと考えられている。万葉歌人として著名で６８３年にあたる天武十三年に没す）の「押坂墓」が「押坂陵域内東南」にあると記されている。

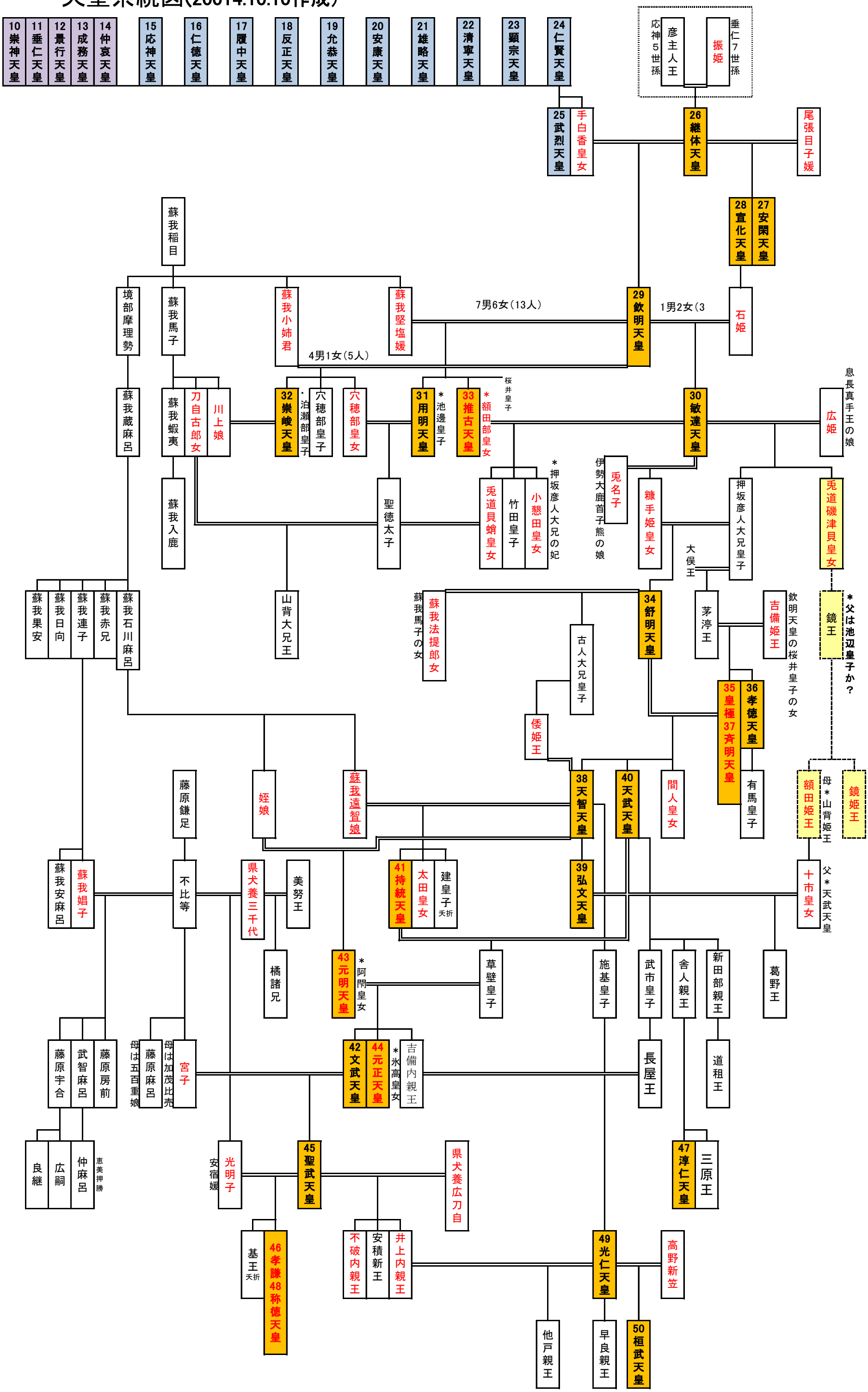
円墳（現・大伴皇女・押坂内墓）

直径 15m よりやや大きい円墳だが詳細不明。
「延喜式」には、大伴皇女の　「押坂内墓」が「押坂陵域内」にあると記されている。

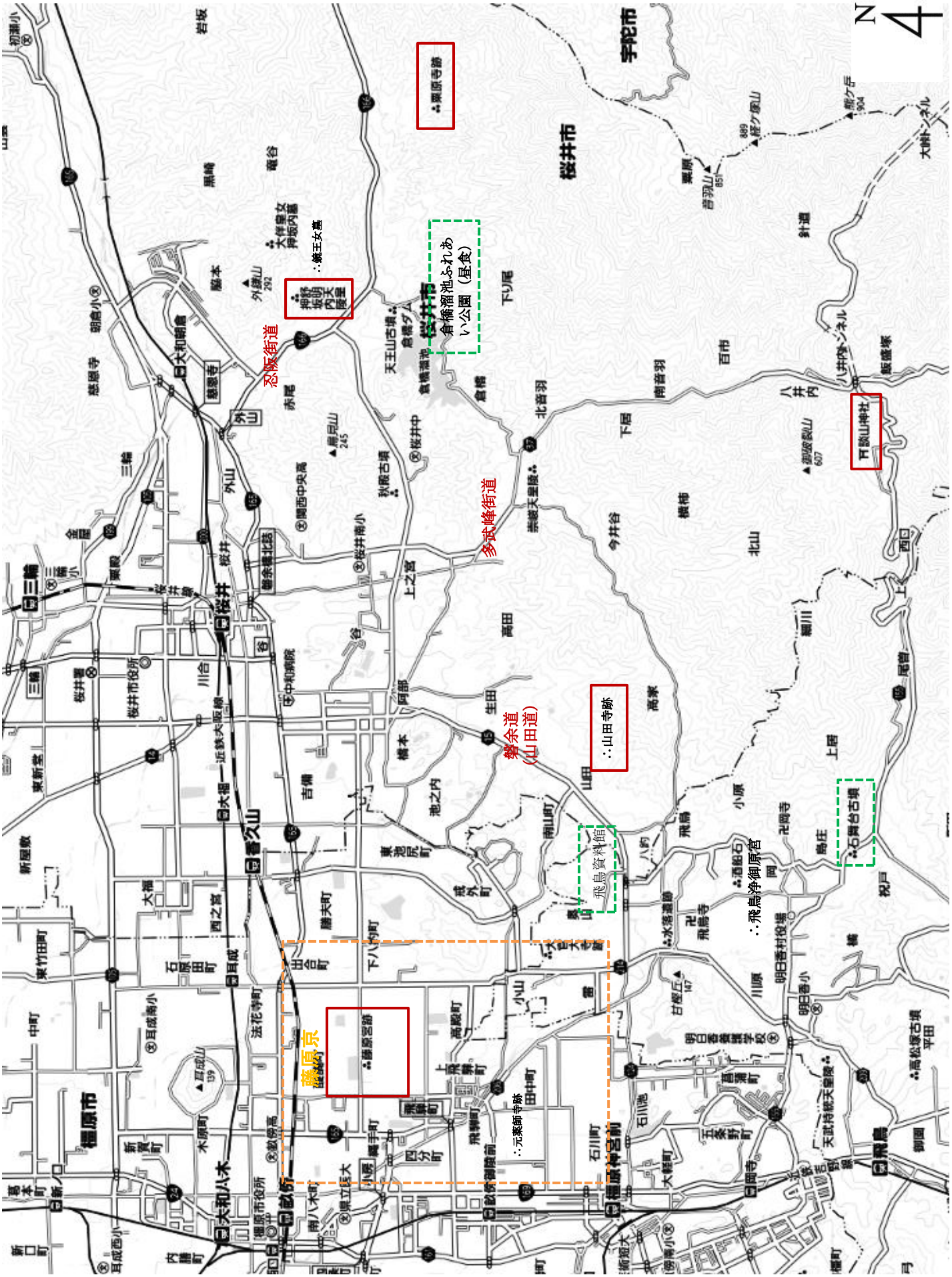
田村皇女（糠手姫皇女・押坂墓）

「延喜式」には、田村皇女（糠手姫皇女、「日本書紀」によれば敏達天皇の皇女で、押坂彦人大兄皇子の妻、舒明天皇の母）の「押坂墓」が「舒明天皇陵内」にあると記されている。
（没年は白村江の戦い（６６３）以降と見られ、舒明天皇陵に合葬されたものと考えられる）

天皇系統図(20014.10.10作成)



歴文１１月研修会資料

万葉歌人額田王の生涯を訪ね談山神社、粟原寺跡を巡る

（平成26年11月11日（火） 歴史文化クラブ）